

氏 名	川田 美和
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 68 号
学 位 記 番 号	看博第 23 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 28 年 9 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の親を対象としたエンパワメントプログラムの開発 Developing a support program for fostering empowerment in parents of disabled adults with high-functioning autism spectrum disorder
論 文 審 査 委 員	主査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学) 副査 教授 畦 地 博子(高知県立大学) 教授 田 井 雅子(高知県立大学) 教授 池 添 志乃(高知県立大学)

論文内容の要旨

【研究目的】本研究の目的は、成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の親を対象としたエンパワメントを促進するプログラムの開発を行うことである。

【研究の枠組みと方法】

《第 1 段階：プログラム開発》：エンパワメントモデル（野嶋,2006）とアンドラゴジーモデル（Knowles,1980）を理論的前提とした。ニーズ調査と概念分析に基づき、①子どもや自分への理解を深め、現実的な課題への対応について話し合える、②主体性を取り戻し、自分のコントロールの方法について話し合える、③サポート資源とのつながりを継続・強化・拡大する方法について話し合える、④現実的で前向きな見通しがもてる、の 4 つを目標としたプログラムを開発した。

《第 2 段階：準実験研究によるプログラム評価》：便宜的サンプリング法による準実験研究を行った。成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の親を対象として介入群とコントロール群を設定し、筆者修正版 FES、GHQ28、SF36-ver2 をアウトカム指標とした両群比較、さらに介入群には、主観的エンパワメント感調査票（筆者作成）によるアンケート調査、プログラム中の録音、プログラム終了後の半構成的インタビューを実施し、統計的手法と質的手法を用いて多角的な評価を行った。

【結果】対象者は、介入群 21 名、コントロール群 15 名の計 36 名であった。アウトカム指標の両群比較の結果、介入後の FES の＜家庭＞の項目、GHQ の＜総合得点＞と＜不安と不眠＞の項目、SF の＜活力＞と＜心の健康＞の項目で有意差（ $p<0.05$ ）がみられた。いずれも改善の方向に変化しており、プログラムは、親のエンパワメントや精神的健康状態、QOL の改善に効果があった。その他の結果からも、概ねエンパワメントの促進に有効だったと言えた。ただし、エンパワメントの 5 つの属性のうち《前向きな見通し》のみ、他の属性と比較すると効果が乏

しかった。プログラム終了後のインタビューによる質的分析においては、エンパワメントされた親達の実際の生活の中で子どもに対する接し方が変化したり、サポート資源にアクセスする等の実生活における効果も明らかとなった。

【考察】①親ができる将来への備えと、②親が辿る心理的なプロセスの2点をプログラムに加える必要があること、必要に応じて個別サポートを組み合わせることが重要であると考えられた。さらに、親とうまく連携しながら成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害 ASD-者を適切に支援できる支援者の育成は、支援者に課せられた大きな課題であると言えた。

審査結果の要旨

審査委員会においては、下記の点で、独創的で、臨床的にも有意義な研究成果を導いた博士論文として高く評価した。

1) 今日的課題を取り上げ、看護学としての貢献を模索していること

発達障害者及びその家族への支援は解決すべき緊急の社会的課題となっており、看護学に基づいた標準化された支援プログラムの開発も求められている。川田氏は、このような状況のなかで、成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の親を対象としたエンパワメントを促進するプログラムを開発するという研究課題に取り組んでいる。

2) 理論知と臨床知の統合によりプログラムを作成していること

本研究は、成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の親に焦点を当てた体験に関する文献ならびに支援プログラムに関する文献を幅広く概観した上で、プログラムが依って立つところの理論的基盤として、エンパワメントモデルとアンドラゴジーモデルを選択している。また、川田氏は精神看護専門看護師として豊かな臨床経験を有しており、プログラムの開発に先立って、当事者とその家族から聞き取りを行うとともに、協働参画型で「家族の経験を語る」DVDを作成し、このDVDの一部をプログラムに活用している。理論知と臨床知を統合する形で、10のSessionから成るプログラムが作成されており、プログラムの基盤形成が優れていることも高く評価した。

3) 熟考された準実験研究を企画し、介入効果を明らかにしていること

本研究では、アウトカム指標として、①FES(Family Empowerment Scale、②GHQ-28、③SF36、④プログラム中の発言内容の評価、⑤プログラム終了後の主観的評価を活用している。そして仮説を立てて介入を実施している。その結果として、親のエンパワメントや精神的健康状態、QOLの改善に効果があることを証明した。すなわち、対象者数に限界はあるものの、理論知と臨床知を統合することによって導かれた本プログラムは、高機能自閉症スペクトラム障害者の家族のエンパワメント、精神的健康、QOLをもたらすプログラムであると判断できる。

審査委員会は、今後本プログラムをさらに改良し、臨床に普及していくことを期待する。